

「学習語彙 5000 語」の特徴とその必要性

1. すべての子どもたちに学習権を

子どもの権利条約に批准している日本は、すべての子どもたち、すなわち国境を越えて移動する子どもたちやマイノリティーの子どもたちにも、学習権を保障し、文化的アイデンティティーや言語、価値観を尊重していくことが求められています。しかし現実には、外国人の子どもたちの多くが学校での学習や生活習慣に困難を感じており、そのため不登校になったり退学したりする子どもも少なくありません。彼らの多くは、一度は日本の学校に通ったものの、授業についていけない、日本の学校文化になじめないなどの理由で通わなくなった子どもたちです。

授業についていけない原因の一つに、学校における日本語教育プログラムの不十分さがあげられており、特に初期指導を終えた後の教科学習を理解するための学習言語能力を高める中期の指導法については試行錯誤の段階です。学習言語能力の育成に文法的知識なども重要であることは自明ではありますが、特に、教科の理解に直結するのは読解力です。そこで読解力と最も相関関係が高い語彙力を高めるため、「子どもたちが授業理解に必要な語彙とは何か」を考え¹、その語彙を演繹的に5000語リストアップして日本語非母語の生徒たちが手にする教材を作りました。

2. 「学習語彙 5000 語」と辞書との違い

私たちが作成した語彙集と辞書との違いは、一言で言えば、収録されている語彙の数と種類です。よく使われる『日中辞典』北京・対外経済貿易大学／北京・商務印書館／小学館共同編集（小学館）には、「8万3千語。用例12万。日本人に分かりにくい点、間違えやすい点をていねいに説明」とあります。私たちは、日本語が初中級の非母語話者の中学・高校生を対象者と考えているので、初級の「本・電車・お母さん」などの語彙はこの語彙集には入っていません。（初級段階の語彙でも、多義性のある語、および改訂版では和語の基本動詞を52追加）

また、旅行者／ビジネスマンであれば使うであろうアタッチメント（附件）・パスポート（护照）なども選ばず、教科学習で使う語（例：花粉・水蒸気・主語・述語・代入）を中心に取り上げました。そして、母語話者であれば小学生低学年でも分かっている、中学・高校であらためて教師が説明しないであろう語（例：空っぽ、わき）も特に拾い上げ、約5000語の語彙集としました。

先ほどの『日中辞典』（小学館）で「あげる」を引くと、＜上げる＞ ＜挙げる＞ ＜揚げる＞ の三つが示され、＜上げる＞で12項目、補助動詞として3項目、＜挙げる＞は5項目、＜揚げる＞は4項目挙がっています。「学習語彙 5000 語」ではその全てを扱わず、必要最小限でなおかつ中国語でニュアンスが異なると思われる場合それぞれの意味で用例を挙げ、使い方が分かるように工夫しました。

例えば、＜上げる＞では次のように示しています。

＜上げる＞	抬起、扬起	她扬起脸看了看我。	彼女は顔を上げ、私を見た。
	举起	妈妈将筐子举起放到了架子上。	母はかごを棚に上げた。
	放（声）	姐姐惊吓得大叫了一声。	姉は驚いて大きな声を上げた。

提高、増加	父亲把收音机的声音量调大点儿了。	父はラジオのボリュームを上げた。
送给	这本书送给你。	君にこの本をあげる。

また、漢字圏の子どもたち、非漢字圏の子どもたちどちらにも分かりづらいカタカナ語を多く取り上げました。

単語だけ覚えても長期記憶につながらず運用能力が育たないので、文脈や場面の中で語彙の意味を覚えられるよう、用例文作成にかなりの時間と労力を費やしました。自然な日本語文の中での使われ方を学ぶことによって統語能力を高め、母語訳との関係からその語の意味を理解し、かつ母語力の保持にも役立てようとしてきました。また、例文にルビを振り、指導者が不在であっても自学自習できるよう配慮しました。

3.母語を利用した教材『学習語彙集』の必要性

読み書きできるまでの言語を習得するためになくてはならないものが辞書です。辞書類を用意した国際教室やボランティア教室、生徒の家庭は、そう多くはありません。学校でも、ボランティア教室でも、家でも、図書館でも、生徒たちがいつでもどこでも自由に使える辞書的な副教材を一人1冊持っているようであれば、生徒たちの自立的な日本語学習は難しいでしょう。常に学校の先生やボランティアがついていられる訳ではありませんので、自立的な学習方法を身につけさせてあげなければなりません。日本語母語話者用に作成された、8万語もの語が日本語で説明されている日中辞書は、年少者のJSLの教材としては不適當と言わざるを得ません。

留学生が自分で望んで来日している一方で、多くの子どもたちは親の都合で来日しているため、学習のモチベーションが低い生徒がいるのも事実です。見やすく勉強しようという気になるものを彼らに提供したいと考えています。

現在、年少者の日本語教育において一番問題となっているのは、日常会話には不自由しないが教科書の内容はほとんどわからず、日常的な文も書けないという生徒が予想以上にいることであり、これは社会学者や人権擁護の立場の人々からも突き上げられている問題でもあります。JSLの指導法が確立しておらず、特に南米出身の子の3割が不登校になっている昨今、全ての子どもたちに学習権を保障するため、つまり教育に格差が生じないよう日本語を学びやすくするための副教材として、母語を利用した教材を作ることが必要です。

マジョリティの言語の押し付けではなく、マイノリティーの言語である母語を使った教材を作り学習環境を整えることは、マイノリティーの人たちの人権が尊重され、それぞれの文化や経験が認められるような多様で豊かな日本社会が実現するための第一歩であると考えています。

ⁱ 中島和子(2001) <http://www.colorado.edu/ealld/atj/ATJ/seminar2001/nakajima.html> は、日本語学習において語彙力が会話力と高い相関を示し、重要であることを指摘している。また、基本的な単語でどの程度のことがわかるかという語のカバー率は、英語・中国語・フランス語などは、3000語知っていれば90%前後理解できるが、日本語は、90%カバーするには10000語近く必要だという統計もある。『日本語教育概論』水谷信子(1997)放送大学教材/『図説 日本語』角川小事典9(1982)